リリカルなのはStrikerS　陽気な悪魔狩人

♪♪ダンテ♪♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　陽気な悪魔狩人

【Ｎコード】
Ｎ９０１０Ｌ

【作者名】
♪♪ダンテ♪♪

【あらすじ】
ある悪魔狩りが不気味に輝く宝石を手にしたことによって物語が動き出すッ！！
初めての作品でしかも不定期更新ですがよろしくです！
なのは×ＤＭＣコラボです！

プロローグ　神様のバカヤロー！（前書き）

この物語の主人公はオリジナルです！
原作のダンテやネロなどはでません！　原作が主人公じゃなきゃだめだッ！っとゆうかたは回れ右でお願いします！

最後に作者はちょーがつくほどの初心者です。　だから暖かくみまもってくれたらうれしいです！

それではどーぞ！

プロローグ　神様のバカヤロー！

「ふぅ～。　これで最後かな」

どーもアレンです！　今俺は依頼で廃墟にいる悪魔を狩っていますッ！

「にしても最近悪魔多いような気がするな～　さすがに体がもたねっつ～の！　まっそんなこと言ってもしゃーなしなぁぁ・・・・はぁ～」

・・・ウォォォォン・・　アァァ・・・

「おいおいまじですか。　さっき何体倒したと思ってんの。なに？新種のいじめ？」

「でもこいつらを殺さないと報酬金もらえないし・・・　やるしかしないよね。　Ｈｅｙ！！悪魔どもかかってきなッ！」

そう言うとアレンは愛銃であるエボニー＆アイボニーを構えた

・・・ウォォォォォォォォォォォォォォン！！！！！

すると悪魔達が一斉にかかってきた。

「ほッ！　よッ！　はッ！　なんだこんなもんか！　それじゃ今度はこっちの攻撃だな！！」

「エア．ハイク」

アレンは悪魔の攻撃をすべてかわし空中に魔法陣の足場を作りそれを土台にしてさらに高くとんだ。

「ＳｈｏｗＴｉｍｅ！！　イヤッホー！！！！」
アレンは体を高速回転させてエボニーアイボニーを連射した。
ズドドドドドドドドドドドドドン！！！！！
鉛球の雨が容赦なく悪魔達に襲いかかった。
ギヤァァァァァァァァァァ！！！！！
スタッ
アレンは周りをみわたした。周りは悪魔の死体で酷いことになっていた。
「よしッ！　完璧だな♪　さて早く報酬金もらってなんか食べにいくかな～」
アレンはエボニーアイボニーをショルダーケースにしまい立ち去ろうとしたらある物が目に飛び込んだ。
「なんだあれ・・・・・宝石か？」
アレンの目に飛び込んできたのは不気味に輝いている宝石であった。
「ラッキー♪♪　あんなとこに宝石があるのは怪しいけどこれはきっと日ごろから頑張っている俺に対する神様からのご褒美だなッ！」
アレンは警戒もせずその宝石を拾いポケットにしまおうとするとその宝石に異変がおきた。
「うわッ！！」
宝石が目を開けられないほどに輝きだしたのだ。

「な、なんだこれッ！？　眩しすぎる！！　だれかヘルペスミー・・・・・・じゃなかったヘルプミー！！」

やがて光がおさまった。だがさっきまでいたアレンの姿がない。

「・・・・・・・・ガバッ！！」

「ふぅ～びっくりしたぁ～。　ま、やっと光もおさまったし別にいいかっ！　さて早く報酬金をもらってなんかく・・い・・・・・・に・・・・・・・・・・・・　あれ？　ココ・・・・ドコデスカ？？？」

アレンは起きて回りを見渡すとさっきまでいた廃墟じゃなかった。しかも目の前にはいかもに敵意むきだしのロボットがアレンの周りを囲んでいる。

「え？・・・・・俺さっきまで廃墟にいて・・・・・・・・えぇぇ？！？！　なにこれ～！！？　意味わかんないですけどー！！？　ちょまじこの状況を理解できる人いたらここにきてくれ！！！」

アレンが騒いでいるとロボットたちは一斉に襲いかかってきた。

「これだけは言っておくか・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・神様のバカヤローー!!!」

プロローグ　神様のバカヤロー！（後書き）

ども。作者です。

一言で言いますととっても難しいです。　こんなに表現とかをあらわすのがむずいとわw　なめてました！　だからもっといっぱい他の人達の小説をみて勉強したいとおもいました。　・・・・作文ッ！？w

感想とか指摘とかまってます！　それでわ～

オリ主設定～（前書き）

どもッス！！
今回はオリ主の簡単な設定を書きました！
これからまだまだ増える予定です！
それではどーぞ！

オリ主設定〜

オリ主

名前　アレン，スクワード

年齢　１８歳

性別　男

身長　１７５？

性格　基本自由奔放でバカ　でもしめるとこはしっかりしめる　明るくて面白い

容姿　ちょい長めの黒髪で、眼の色は金でとにかくカッコイイ（ダンテの黒髪を想像してみてくだ　さいです）

好き　甘いもの全般　平和

嫌い　苦いもの全般　悪魔

武器　エボニー&アイボニー（ダンテのパクリました．．．はい．．．）　今はこれだけです。あとで武器はふえていきます。

基本アレンは悪魔を嫌ってます。アレンは過去に色々あり悪魔を憎み悪魔狩りを始めたのも過去に原因があります。　これえは追々話したいとおもいます！！

オリ主設定～（後書き）

ぱくってしまった。。　武器は自分で考えようとしたけど何にも浮かばずあげくのはてにやってしまった。。　ま、いいか♪

最後に書いたアレンの過去ですがまだ書きません。あと少し話が進んだらかきたいとおもいます！

それでは！

接触　1（前書き）

どもっす！

りりかるキャラ登場だぁぁw　内容はグダグダですが一生懸命書きました！

それでわどーぞ！

接触　1

　どーもみなんさん！！　　アレンです！♪

えぇー拾った宝石のせいでわけわかんないとこにきてわかわかんない機械に攻撃されてます。

助けてください・・・・・・・

だれか助けてださぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああい！！！！！！！

「んなこと言ってる場合じゃねーな。　さてどーするかな」

「こんなとこでやられたくないしなぁ～。とりあえずこいつらを壊してここがどこなのかを調べるかな」

「よしッ！　いっちょいきますかッ！いくぜ！　覚悟はいいかッ！？」

　すると機械達は目と思われる部分から赤いビームをはなってきてまた同時にアレンに向かってアームを突撃させてきた。

「うわっ！！　目からビームとかずるっ！！」

　ビームは空中に跳んでかわすが、次は一気にアームが襲ってきた。

「ッチ！！　なめんな！！！！」

するとアレンはエボニーアイボニーを構えてとんでもない速さで連射した。
ズドドドドン！！
すると機械はショートしたあと爆破した。
「Ｔｏｏ　ｅａｓｙ！！　こんなもんかッ！？」
襲ってきた機械達はすべて倒したが、どこからわいてきたか・・いつの間にかさっきの倍以上の機械がアレンの回りを囲んでいる。
「げっ・・・・　まじかよ。　どっから湧いてきたがったこいつら！」
機械たちはまたさっきと同様にビームとアームで襲ってきた。
アレンもエボニーアイボニーで対応するが敵が多すぎで徐々に追い付けなくなっていた。
「敵多すぎだっつーの！！！　銃じゃ対応できないくなってきたな。　仕方ない・・・こい！リベリオン！！！！！！
アレンが叫ぶと空から大剣がアレンの元に降ってきた。
「・・・・ガチャン。これ使うの久々だなぁ～。さぁ続きを始めようか！！　・・・アレ？」
アレンは地面に刺さったリベリオンを引きに抜き構えた。が機械達はアレンの目の前で武器を振り下ろす寸前だった。

ドッッカァァァーーーーン！！！！

無情に機械達の武器がすべてアレンに直撃した。普通の人だったらやられている・・・・そう普通の人だったら。

「・・・・俺じゃなかった死んでるぞ。　オラァァァ！！！」

アレンは死んでいなかった。　そして回転しながらリベリオンを切り刻んで敵を薙ぎ払った。

「悪いな俺は普通の人間じゃないんでな！　それじゃ一気に終わらすぜ！　Ｌｅｔ' ｓＳｈｏｗＴｉｍｅ！！」

ビームを打ってくるのはエボニーアイボニーで撃ち落としリベリオンで周りの敵を壊していく。

その姿はまるで悪魔のようだった。

「ふぅ～　終わったか・・・」

「さて情報収集もかねて町にいってみるか。　あァ～疲れた～。」

歩きだそうとした時変な感覚をかんじた。

（なんだろこれ。　人か？　　どこにいる？）

アレンの感はあっていた。　これは確かに人であった。でも居場所が特定できない。

（周りをみてもいないか・・・・・・　ってことは?！！」

上をみると確かにいた。　宙に浮いてる人達が。

「おいおい。まじですか・・」

（チッ。　こっちは疲れて苛々してんのに）

「時空管理局の機動六課ライトニング分隊隊長　フェイト・テスタロッタ・ハラウオンです！先ほどの戦闘をみさしていただきました。　御同行お願いします！」

「時空管理局の機動六課ライトニング分隊副隊長　シグナムだ。すまんが御同行願おうか。」

二人が言い終わると、バカな頭でせーいっぱい考えてみた。わかのわからないとこにきていきなり機械との戦闘そしてそらを飛んでいたわけのわからない人間についてこいってか・・・・ふざけんな。

「無理だねっていったらどーする?」

「悪いが嫌でもきてもらう。それにさっきの戦闘で質量兵器を使っていたからな。」

次にフェイトが喋った。

「しかもきみが戦った機械はガジェットドローンって言ってロストロギヤのあるものに反応するやつに襲いかかるんですよ！！宝石みたいなのもってませんか?！」

「あぁ～これのことか？」

そういってフェイトにみせる。

「っ！！　それをどこで？！！」

「バーカ。教える義理はないね。　あ、俺の後ろをとったらおしえてやるよ。」

そういって笑いながら歩きだすアレン。

「えっ・・・　まってください！！　まだ話わ・・・」

フェイトが話してる時にシグナムが割り込んできた。

「話は終わってないぞ！！　貴様がその気ならこっちも手荒い手を使わしてもらう！」

シグナムは愛剣のレヴァンティンを抜き

「・・・・　いくぞッ！！」

そして一瞬でアレンの背後につき剣をのどに突き立てた。

接触　1（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・どうでしたか？

こんな中途半端に終わって申し訳ないです。。

感想、指摘などまってます！

接触　2（前書き）

どうも作者です！

今回はとっても短いです。はい。ここで切るのが一番ちょうどいいんで。

それではどぞ！

接触　2

（あれぇ～こいつ速くね？　俺より速くね？　ちょまじ女に後ろとられるとか恥ずかしいんだけどしかも　俺あんなでかい態度とってこのざまとか恥じの上塗りじゃねーかぁぁ！！」

「そういえば貴様何か言ってたな？　俺の後ろをとったら教えるとか何とか」

「・・・・・・・・」

アレンは無言である。

「さっきまでの元気はどうした？　それともあれかこんなあっさりと女に後ろをとられたのくやしいのか？　ん？どうなんだ？」

シグナムはニタニタしながらアレンに問いかける。

「は、はぁ～？！　ちょマジ意味わかんないですけど～！？　え、なに言っとくけどこれわざとだよ？　あはあはははは・・・・」

（よっぽどくやしかったんだな・・）

（よっぽどくやしかったんだね・・）

シグナムとフェイトは動揺してるアレンを哀れみの目で見ていた。

「・・・やめてくんない？　そんな目で俺を見るのやめてくれない

!?・・わぁっったよ!!俺の負けだよ!話せばいいだろッ!!」

アレンは負けを認めそしてここまでの経緯をフェイトとシグナムに話した。

「まとめるとアレンは悪魔狩人〈デビルハンター〉で依頼で悪魔退治をして帰りにその宝石を拾って気が付いたらここにきたんだね?」

「あぁーそうだよ。　俺も何が何だかよくわかんないよ　はぁ〜・・・・・」

「てことはアレンさんもしかして次元漂流者かもしれないよ」

「次元漂流者?　なんだそれ?」

「・・・・・簡単に言えば迷子だな」

「この歳で迷子って・・・・・・・・・ＯＴＬ」

アレンは相当まいってるようだ。

「そんなことはどーでもいい!　んでその悪魔狩人ってなんなんだ?」

「どーでもいいとかひどッ!!!なんだって言われてもそのままの意味だよ!　悪魔を狩る仕事だって」

「だからその悪魔を何かと聞いているッ!」

「なにって言われてもなぁ〜（この感じ・・・・・）　ＯＫ!今悪

魔をみせてやるよ！！」

アレンは腰にしまっていたエボニー＆アイボニーを素早く構え２発頭上に撃ち上げた。

ドンッ！ドンッ！

すると黒い物がアレンの足元に落ちてきた。

「なんだそれ・・・・・」

シグナムは少し動揺しながらアレンに聞いた。

「なんだそれって・・・こいつらがお前が気になっていた悪魔だよッ！！！」

ドンッ！ドンッ！　ギャァァァァァァ！！

今度は下に向かって２発撃ち悪魔〔シャドウ〕は甲高い声をあげて消えた。

「少しはわかってくれたかい？」

そこには２丁拳銃をもった男が立っていた

接触　2（後書き）

どーでしたか？　やっぱり短すぎたかも．．．．でも次はちょっと長めです！

あと今回初めて感想がきました！！

スノーマン様感想ありがとうございます！！！

それでは～

接触　3（前書き）

どうも作者です！！

今回グダグダです。。

それではどーぞ！

接触　3

「わかってくれたかい？」

　さっきまでの雰囲気とはまったく違うアレンに戸惑いながらフェイトは喋った。

「あ、あの～もしかしてアレンさんはアンノウンことしってるんですか？！」

「アンノウン？　なんだそりゃ？」

「貴様が今倒した未確認生物のことだ！」

「あぁ～これのことか」

（こいつら悪魔のこと知らないのか・・・ってことは俺のいた世界じゃないのか？確かあいつも次元なんちゃらって言ってたし・・・はぁ～不幸だ。）

「アンノウンはな最近になって確認された生物でな　・・・・・なにか知ってるようだな？」

「まぁこいつらが悪魔だよ　んでそれを狩ってるのが俺、悪魔狩人さッ！」

　ビシッ！っと親指を立ててシグナムに強気で言うアレン。

「なるほどな。しかもその生物について詳しいようだな・・・なら尚更ついてきてもらおうか！！」

ふたたびシグナムはレヴァンティンを構る。

「えぇぇ～また戦闘かよ．．．．．．どんだけ戦うの好きなんだよ．．．．．．．．．．はぁ～．．．．．．」

「さっきからぶつぶつと．．．．．．さっさと構えんかッ！！」

「うるせーわぁ！！ボケッ！！　こっちはなぁ戦闘ばっかで疲れてんの！　．．．．．あッそうだ！　これで勝負しね～か？」

とアレンはにやにやしながらポケットから一枚のコインをとりだした。

「．．．．．コインだと？」

「そ、表が出たらお前らの勝ちでおとなしくついていく．．．裏が出たら俺の勝ちでここは見逃してくれる　。ど～だ？」

「そんな勝負にｒ「わかりました！　その勝負のりましょう！」っな！？　テスタロッサ！？」

「さっきからシグナム少し暴力的すぎだよ？」

「し、しかしだなテスタｒ「だーめ！」．．．．．くッ！　．．．．その勝負受けよう．．」

フェイト気迫に負けしぶしぶ了承したシグナム。　一方アレンはいうと。

（くっくっく・・・はっはっはっは！！！　勝った！！　この勝負勝った！！　こいつらバカだな（笑）
　コインの確認もしないで勝負にのりやがって！！　わからないみなさんに説明しよ！！！　この
　コインにはちょっとした小細工をしてあり９９％の確立で裏がでるようになっているのだ！！！
・・・・・不正？何それ？美味しいの？）

「あぁーじれったい！！　早くコインを投げんかッ！！」

「あぁ～悪い悪い。　それじゃ～いくぜッ！！」

ピーンッ！　アレンはコインを親指で弾き勢いよく上にあげてしだいに落ちてくるコインをキャッチした。

「さ～て裏か表か、天国か地獄か、答え合わせといこーじゃねーか！」

アレンは二人に見えるように腕を前に突き出しコインを見せた。
その答えは・・・・・・

「お・・・表だ～！！！　勝ったよ！！　シグナム！！」

「そ、そのようだな！！」

子供のようにはしゃぐフェイトと内心びくびくしながらもよろこんでいるシグナム。

「そうそう表がでてお前らのか・・・ち・・・・・？　え・・・？
ＨＡ～？！　いやいや冗談だろ！！！？」

「自分の目で確かめてみるんだな！」

シグナムに言われアレンはおそるおそるコイン見る・・・・・・・間違いなく表がでてる　茫然とするアレン。

「これをみてるみなさんもご一緒にせ～のッ！　うっそぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉん！！！！！」

（えぇぇ！！！！　ＭＡ☆ＺＩ☆ＤＥ！！？　どうしてこうなった！！　確かにあれは９９％だから　あたるかもしれにあけどたった１％の確立を当てたっちゃのかぁ！　あの子たちは！？どんだけだ　よ！！　何？　女神様になりたいのかな？！　君たちは？！！）

「さぁ約束どうり一緒にきてもらおうか？」

「くッ・・・・・・・　ＯＫ～・・・ついていく・・・・・・・・・・・わけねーだろ！！！！！」

ズドドドドドドン！！！！　アレンはエボニー＆アイボニーを地面に向かって連射し、周りが煙で覆われた。

「ば～か！　誰がついていくか！！　俺はなぁ自由で陽気な悪魔狩人なんだよ！！　ま、楽しかったぜぇ～～！　またどこかで会えたらそん時はよろしくなぁ～」

［エア・ハイク］

アレンは空中に魔法陣を展開しさらに高く跳ぼうとする。しかし・・・・

ガシンッ！！

「・・・・・・あり？　動けないよこれ？　バランスとれ・・な・・・い・・・・・・・・・　あぁぁぁぁぁぁ！！」

ドコォォォォォォン！！　手錠〜バインド〜両手両足をふさがれてバランスがとれなくなりあんのじょう地面に落下した。

「いっつつつぅぅぅ〜・・・・・　なんだこれ？！　全然動けないよこれ！！！？？」

「ふっふっふ・・これはなバインドと言ってな貴様みたいなゆうこと聞かないやつらを捕まえる便利なものでな」

「へ、へぇ〜　そうなんですか〜　それでいつこれをとってくださるんですか？シグナムさん・・・・いやシグナム様？」

「レヴァンティン。カットリッチリロード。」

ガシャン！ガシャン！

「え・・・・・・・シグナムさん？　何をしてらっしゃるんですか？　え・・・・？」

「さぁお仕置きの時間だ・・・」

「紫電・・」

「ちょ！！？　フェイト助けてッ！！　５０円あげるからッ！！」

「・・・・・・」（敬礼するフェイト）

「OK。落ち着こう。　な？　とりあえず話し合おう。　暴力じゃなにも解決・・・・」

「一閃！！！！！！」

「しないだ・・・・・ギャァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！・・・燃え尽きたぜ・・・・真っ白にな・」

アレン気絶。

「終わったな・・・・・・今までの仕事の中で一番つかれたぞ私は・・・・・」

「私もだよシグナム・・・・・アレンさんをはこんで早く戻ろう」

「あぁ～」

「「はぁ～・・・・」」

二人は大きなため息をはいた。

接触　3（後書き）

どーでしたか？

グダグダだったでしょ？笑

感想、指摘まってます！

あ、次からアレンと作者のあとがきコーナーが始まります！笑

更新停止です。。

なんでこんなに大変なんだぁぁぁぁ！！！！！！！！！！

作者は今、大学受験の勉強真っ最中です・・・・　あと面接の練習とか作文とかの練習もあり今書いてる作品を更新する暇がなくリリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　陽気な悪魔狩人はしばらくの間更新停止しようと思います。。

この作品を楽しみにしてくれていた読者様本当にすいません！！！！

更新予定は１２月ぐらいからです。

この作品は作者の初めての作品ですから絶対に完結まで書きます！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9010l/

リリカルなのはStrikerS　陽気な悪魔狩人

2010年10月21日21時29分発行